

サイバー大学

数理・データサイエンス・A I 教育プログラム（リテラシーレベル）自己点検評価

評価日時：2025年4月25日

会議名称：内部質保証委員会

開催場所：サイバー大学（オンライン開催）

参加者：学長、学部長、各部署長

目的：2024年度の数理・データサイエンス・A I 教育プログラムの自己点検評価

評価項目：文部科学省「数理・データサイエンス・A I 教育プログラム認定制度（リテラシーレベル）」の審査項目の観点による評価

生成AIについて先行して最新のモデルカリキュラムに対応していることを評価

認定制度の審査項目	モデルカリキュラム対応箇所	評価結果	評価理由
数理・データサイエンス・A I は、現在進行中の社会変化（第4次産業革命、Society 5.0、データ駆動型社会等）に深く寄与しているものであること、また、それが自らの生活と密接に結びついているものであること。	導入 1-1. 社会で起きている変化 1-6. データ・A I 利活用の最新動向	S	現在までの技術革新の歴史や産業界の動向を踏まえ、我々の生活に結び付いたA I サービス等（生成A I 含む）の概要を理解させている。
数理・データサイエンス・A I が対象とする「社会で活用されているデータ」や「データの活用領域」は非常に広範囲であって、日常生活や社会の課題を解決する有用なツールになり得ること。	導入 1-2. 社会で活用されているデータ 1-3. データ・A I の活用領域	A	画像認識や自然言語処理分野に関する基礎知識等、データ活用による日常生活及び社会課題の解決について理解を深めている。
様々なデータ利活用の現場におけるデータ活用事例が示され、数理・データサイエンス・A I は様々な適用領域（流通、製造、金融、サービス、インフラ、公共、ヘルスケア等）の知見と組み合わせることで価値を創出するものであること。	導入 1-4. データ・A I 利活用のための技術 1-5. データ・A I 利活用の現場	A	様々な分野（製造業、交通、農業、社会インフラ、家庭、医療、購買、金融）での応用事例や最新動向に関する知識を修得させている。
ただし数理・データサイエンス・A I は万能ではなく、その活用に当たっての様々な留意事項（ELSI、個人情報、データ倫理、A I 社会原則等）を考慮することが重要であること。また、情報セキュリティや情報漏洩等、データを守る上での留意事項への理解が重要であること。	心得 3-1. データ・A I 利活用における留意事項 3-2. データを守る上での留意事項	A	人工知能を活用する際の倫理観、情報セキュリティの3要素、プライバシーの課題等について学習させることで、注意喚起を行っている。
実データ・実課題（学術データ等を含む）を用いた演習など、社会での実例を題材として、「データを読む、説明する、扱う」といった数理・データサイエンス・A I の基本的な活用方法に関すること。	基礎 2-1. データを読む 2-2. データを説明する 2-3. データを扱う	A	統計知識修得のため、ビジネス事例やオープンデータ等の利用を通じて、分析ツールによるデータ解析手法を学ばせている。

S：審査項目の観点を上回る成果を達成した。

A：審査項目の観点通りの成果を達成した。

B：審査項目の観点通りの成果を達成できなかったが、達成に向けての対応策が立案され、対応に着手している。

C：審査項目の観点通りの成果を達成できなかった。さらに、達成に向けた対応策が立案されていない。